



ピッポ新聞

2002

2

No.160

子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

〒424-0886 清水市草薙1-6-3

TEL&FAX 0543-45-5460

ピッポ

URL <http://www.pippo.co.jp/>Email pippo@diana.dti.ne.jp

ブックトークってなに?

近頃、子どもの本と関わっている人たちの周りでよく耳にするのが、「ブックトーク」という単語です。聞いてみると、どうやら、子どもの前でしゃべりながら(言葉で)本を紹介することを、こう言うのだそうです。

横文字にすると、なにやら新しい試みに聞こえるから不思議なものです。しかし、これは何も目新しいことでも何でもありません。思えば、ぼくが本好きになったのだから、中学の時から先生が本を読んでくれたり、紹介してくれたのが一番影響しているのです。昔から、先生は子どもに本を紹介してくれたものです。それだったら、「本の紹介」と日本語で言えば良さそうなものです。

ところが、これがどうも「ブックトーク」と呼ばなければならない理由が有るようです。その第一は、「ブックトーク」を積極的に推進する団体(出版社や本屋やら、新聞社なども参加している)の存在と無関係では無いようです。

この団体は、「ブックトーク」とはこうやるのですよ。と、ボランティアを集めて、模範演技を示して、例えば、「テーマ」を決め、テーマ別にその関連の本を5冊前後集め、どう紹介すればよいのかをやってみせ、「さーみなさん、こういう風に子どもの前でやりましょう」と示した上で、中学や高校へ出かけて行って、子どもの前でそれを実践するというのです。しかも驚

くことに、子どもに紹介する本があらかじめ決められているというのであります(強制では無いらしい)。さらに親切なことには、その説明会の会場でその本を売っていて、なるべく、「ブックトーク」ではこの本を使ってくださいと言うのだそうです。これに参加していただくお客さんは、それを聞いて「せっかくボランティアに参加しようと思ったのに」と、怒って帰ってきた人もいますし、本を何千円も買ってしまった人もいます。

出版社は自分のところの本を売るためにこれに参加しているのだし、書店は子どもにその本が売れることを期待しているのです。新聞社のメリットは広告収入が参加出版社や、協力書店から入ってくるのです。さらに言うところ、これを企画した広告代理店が後ろにいるのです。

だから、この「ブックトークキャラバン」は完全に金儲けのために企てられたものなのです。

これで、だいたいおわかりでしょう。ブックトークを推進する団体の実体とはこんなものなのです。

もちろん、こんなことは表だって、この団体の結成理由や参加理由などに書いてなどありません。子どもに読書の喜びをとが、読書の大切さとかの、もっともらしい理由が書かれているにちがいないかもしれませんが・・・。

他人様に本を紹介するということは、自分が自主的に読んだ本を、「この本はとても面白かったから、是非あの子にも紹介したいな」というのが本当なのだと思えます。少なくとも、他の人が選んだ本を無理に読んで、それを子どもに

紹介するなどということとは、子どもに大変失礼なことだし、あまり意味もないと思います。

そもそも本を紹介するのに、どこかが音頭をとって、ボランティアを募り組織的に展開するようなことなのでしょうが？

先程「あの子に紹介したいな」と書きましたが、ぼくは、このことこそ大切だと考えるのです。この場合の「あの子は」は、どんな子かが、紹介者にはある程度分かっているのですね。だから「この本を」を紹介したくなるのです。

ぼくに言わせれば、こんなことを組織的に展開することが、不自然なのです。本を紹介するなどということは、もっとこじんまりと、身近な範囲でやればよいことなのです。だって、読書とは個人的な行為なのですから。

どうしても学校でやりたければ、それは授業の中で先生がやればよいことなのです。何も外からのボランティアに頼る必要など無いのです。(読み聞かせも同じ)生徒の前では先生の方が専門家ですから。

子どもに「ブックトーク」が是非必要だと考えているのなら、わざわざ外からボランティアなど受け入れず、自分がやればよいのです。それこそが、教師の仕事なので、普段、「読み聞かせ」や「ブックトーク」をやっていない先生は、子どもに「本を読みましよう」などと、いわないことです。

先生が真剣にあるいは面白おかしく本を紹介すれば、子どもは本に興味を示すこと

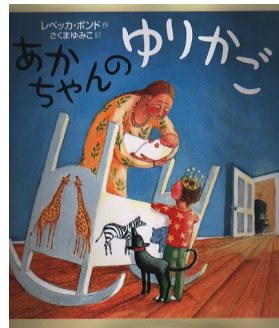
間違いないのですから。

さて、みなさんはこの「ブックトーク」について、どんなご意見をお持ちなのでしょう？メールやファックスなどでご意見をお寄せください。

ねー、この本読んだ？

『あかちゃんのゆりかご』(レベッカ・ポンド・作 さくまゆみこ・訳 1470円 偕成社)

5人家族に新たに赤ちゃんが生まれることになりました。お父さんは生まれてくる



赤ちゃんのため
にロッキングベツ
ド作ります。お
じいさんはその
ベッドに動物や
鳥の絵を描き、
色を塗りました。

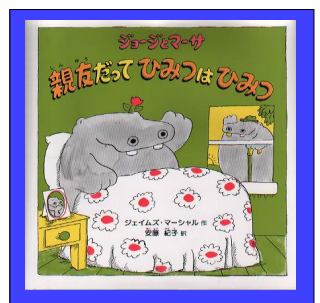
おばあさんは・・・と、家族みんなが赤ちゃんのために何かしながら、誕生を待ちわびる様子が描かれていきます。この家族の暖かな気持ち伝わってきます。

3歳ぐらいから

『ジョージとマーサ 親友だってひみつはひみつ』(ジェームズ・マーシャル・作 安藤紀子・訳 1365円 偕成社)

カバのジョージとマーサは大の仲良しです。しかし、いくら仲良しでも、そこには

お互いに守らなければならないことや、踏み込んではいけないことが有ります。そんなことがらを、5つの分かりやすい話にして語ってくれます。きっと、わたしたちにも思い当たること

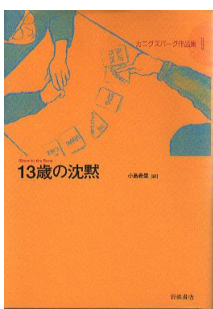


がでてくることでしょう。ジョージとマーサのシリーズは全4冊。既刊は本書と『カバなふたりはきょうもいつしよ』の2冊

5歳ぐらいから

『13歳の沈黙』(カニグズバーグ作品集9 小島希里・訳 2625円 岩波書店)

親友のブランドゥエルが、妹ニッキの事故を切っ掛けに、一言も話さなくなってしまう。コナーは青少年保護センターにいるブランドゥエルと意志疎通を図ろうとし、或ことからヒントを得て試してみた。するとブランドゥエルが応答したのである。コナーは毎日保護センターに通い、彼の妹の病状をしらせたり、ブランドゥエルのため、事件の真相をもとめて奔走する。13歳という思春期の鬱屈した内面を抱えながら、苦悩しながら成長する少年たちの姿を見事な筆致で描いてゆく。この作品は、カニグズバーグ作品集全10巻の1回



目の配本として、新たに翻訳された。楽しむ中学生から

徒然なるままに

おじさんの春夏秋冬

大井川源流の 24 年

これまでも繰り返し書きましたが、ぼくは大井川の源流へ溪流釣りに通い続けています。大井川の源流は山が深いから、里ではあまり目にするのがない動植物に出会う機会も多くありました。はじめの頃は、釣に夢中で、自然を楽しむゆとりなど全くありません。何も見えなかつたし、見てもしなかつたのです。いつのころからか、それが少しずつ見えるようになり、そのことがとてもうれしくなってきたのです。ですから、最初のころにくらべると、ぼくの釣りも随分変わってきました。近頃では、釣るには余りこだわらず(ほんとかな?)源流帯へ出かけることで満足なのです。というより、釣りだけを目的に出かけるのではなく、沢を詰めて、さらに、山の頂に立つというスタイルが多くなったのです。

秋になると山の幸を採取する楽しみが加わります。一時、ヤマブドウ採りに熱心だったことがあります。ヤマブドウは果樹酒だけでなく、ジャムやジュースにしても野生味があつて、ぼくは好きです。

単独で釣行したときのこと、確か二軒小屋の近くで、大井川の本線を釣ろうと、工事中の道を降りていったのです。下りながら斜面を見ると、ヤマブドウの蔓がびっしり斜面を被っているのが目に入りました。ご存知の人もいるかも知れませんが、ヤマブドウは離れたところからや、上から見ただけでは実がついているかわかりません。

それに、ヤマブドウの蔓が密生しているからといって、実がついているとも限らないのです。

その時は、道を下って回り込んで下から見上げると、何と、ブドウの房がたわわに垂れ下がっていたのです。もう釣りどころではありません。ぼくは天にも昇る気持ちで、この自然の贈り物を素直にちょうだいすることにしました。ところが、下からでは灌木や藪がじゃまして、ヤマブドウの下には近づけません。そこで元に戻って、ぼくは木に乗り移ってブドウの房を収穫することにしました。

いつでもザックにはスーパリーの袋を4〜5枚入れているから、採ったブドウをその中に手当たり次第に入れていったのです。なにしろ夢中だったので、気が付くと、袋は3袋も満杯になっていました。ブドウはまだたくさんありましたが、車まで運ぶ距離のことを考えてやめました。ザックに1袋吊り下げ、両手に各1袋ずつ持って運んだのですが、我ながら欲張ったものです。家に帰って量つたら、40kg近く有りましたからね。

でもね、あまり欲ばると後で苦労や失敗を抱え込むことになるのです。ヤマブドウは生食もできますが、ジャムや果樹酒にするには房から実を一個一個外さなければならぬし、ゴミを取り除くため洗うこともしなければなりません。これが相当面倒なんだよね。ヤマブドウならカミさんも(自分も好きだから)手伝ってくれるけど、これが魚だったりしたら、全部自分で処理しなければならぬのです。いつだったか、清水港で、カマスを百匹

ほど釣ってきたとき、これを背開きにするのに翌日のお昼頃までかかってしまい、その日は店を休んでしまいました。

イワナをたくさん釣りすぎて失敗したこともあります。泊まりがけで東俣へ釣行したときでした。池の沢の小屋へ泊まって、釣ったイワナを焼き廻らしたのですが、釣った数が多過ぎて夜遅くまでかかってしまい、最後の方はもういい加減に処理して寝てしまったのです。翌日は池の沢を詰めて山を越え、途中もう一泊して、山梨県側へ下山したのですが、家に到着して新聞に包んだイワナを取り出したら、すべて傷んでいて食べる事ができなかつたのです。

商売ではないのですから野生の恵みは、程々の収穫が適当なようです。などと分かったようなことを書いても、得物を目の前にすると、狩猟本能を押さえることができないでいまだに困ってしまいます。話は違いますが、釣りなどで近頃よく、得物をリリーアスルなどと言つこと聞きますが、ぼくには全く理解できないことでもあります。

さて、秋の大井川の源流の自然の恵みは、ヤマブドウ以外にも多くあります。アケビ、クルミ、サルナシ、クリ、これらは標高(千五百m前後)の余り高くなく、くろまめの木や、コケモモなども採取(こちらは登山の途中で口に入れる程度)できます。しかし、秋の最大の楽しみは、何と言つてもキノコ採りですが、これはまた別の機会に紹介します。

『崖の国物語 2 嵐を追う者たち』(ポール・スチュワート・文 クリス・リデル・絵 唐沢則幸・訳 1680円 ポプラ社)



これは長編の冒険ファンタジーです。主人公トウィッグが深森で迷い、思いがけず大冒険の末に、飛空船の船長である自分の父親に救われて、その乗組員になるのが第1巻。この2巻では空中にある神聖都市の危機を救

い、さらに、地上町を環境汚染から守ために嵐晶石がどうしても必要なのである。しかし、その嵐晶石は大嵐のときに薄明の森でしか生まれない。それを求めて、再び大嵐を目指して飛空船で父が出発。残されて彼は父の敵に利用されることも知らずに密航する。ところが、大嵐のまつただ中で乗組員は飛空船を捨てる状況に陥ってしまう。トウィッグも船を後に、しかし船長である父は飛空船とともに嵐の中へ……。

この物語、場所や登場する生き物(異形ではあるが、すべて人間と同じ知性を持っている)の多くが作者の想像であるが、これを描いたりデルの絵は、この物語をより具体性と、想像性を読者が得る手助けをしてくれる。

小学校高学年から

『サラシナ』(芝田勝茂・文 佐竹美保・絵 1470円 あかね書房)



ヒョウタンに乗ってサキは窓から飛び出した。着いたところは多摩川なのだが、様子がおかしい。なぜか千年以上前の時代に来てしまっ

たのだった。サキは、そこで天女として不破麻呂という男に出会った。現代へ帰ってきたサキだが、不破麻呂を想う気持ちは高まるばかり、会いたくてしかたがなかった。そして、再び時を越えて……。これは日本の古代と現代を行き来した、恋物語。人を分かったり、好きになったりすることとは、どういふことが語られている。

中学生ぐらいから

岩波書店の復刊

『ワニのオーケストラ入門』(エリオット・文 アロウッド・絵 芥川也寸志・石井史子・訳 1680円)

『ゴリラが1匹ー なんだかおかしなはずのほん』(アッコ・モロズミ・作 松野正子・訳 16

インフォメーション

80円)

『長ぐつをはいたネコ』(ペロー・文 マーシャル・ブラウン・絵 光吉夏也・訳 1680円)

『そんなときなんという?』(S・ジョスリン・文 M・センダック・絵 谷川俊太郎・訳 882円)

『ジョンくんえほん全3冊』(ポプ・グレアム文 谷川俊太郎・訳 2079円 各693円)

『新装丁のマーヒト作品集』(青木由紀子・山田順子・清水真砂子 各訳)

『足音がやってくる』 1785円 『めざめれば魔女』 2100円 『送りものは宇宙のカタログ』 2205円 『空中の王国 九つの愛の物語』

1680円 『クリスマスの魔術師』 2520円 『ゆがめられた記憶』 2415円 『危険な空間』

1890円 『ヒーローのふたつの世界』 2205円 『地下脈系』 2100円

岩波から新刊も!

『シンドバットの冒険』 『シンドバットと怪物の島』 (各1980円 小学3年~大人まで)

はじめて『千夜一夜物語』に触れる子どもはもちろん、大人も十分楽しめる豪華な絵本(岩波のチラシより)

今月のお話会は2月23日(土)

宮崎さんの「ばやおはなしかこ」は午後2次からピッポでやります。どうぞお出てください。

お詫び 先月号の『児童文学最終講義』の作者を掛川恭子さんと書いてしまいました。猪熊葉子さんの誤りでした。お詫びして訂正いたします。